

後書

後書

「ウチら、どんな夫婦になるんやろ……ね」

「えっ!？」

言葉を失う。満面の笑みを復活させる美英子に何とか答える。

「クサイ夫婦や」

「イヤや。そんなん」

「せやな……せや! 俺も大事なことを忘れてた……」

「何を」

今、告白しておかないと後悔すると意を決して口を開くが、言い出せずにごまかす。

「俺、まだ学生や。夜間の」

「せやから大学まで来たん」

「三月生まれやから年下と同じやし、頼りないし、蓄えもない。生活でけへんで……」

「やっぱり、年下やったんや」

「?……それに……」

後書

今度はと思うが言い出せない。

「それに無職や」

美英子は軽く驚いた振りをするだけでじっと見つめる。ついに決心する。

「俺……夏子を……夏子をにん（しん）……」

すかさず美英子は俺の頬を強く突く。

「もう、エエやん」

意外な反応に俺は戸惑う。もう一度ハッキリ言おうとすると美英子の方がハッキリ言う。

「過去は過去やん。つべこべ言わず、お姉ちゃんに追ツイいで」

「お姉ちゃん？」

美英子はもう一方の指で自分の片笑窪を押さえる。

「おばちゃんと違うで」

そう言うのとバッグから小袋を取り出して悪戯つぽく微笑む。

「ウチも告白したい事、あるん。聞いてくれる？」

身構える。

「まさか妊娠した事あるって……」

「ブスは相手にされへんから、そんなん、ありえない。それよりウチ、なんで『アホや』て、言うんか分かる？」

後書

「アホやない」

「黙って告白聞いて」

視線を少しだけ外して再度身構える。

「ウチ、高校の時、勉強せんとテレビドラマばかり見て留年したん。せやから、みんなから『アホや、アホや』とボロクソに言われたん……特にオカンがきつかった」

「えっ、ほんまに！」

「嫌いにならんといてや」

「なるはずないやんか。せやけど俺もアホやから俺たちアホな夫婦になるなあ」

「クサイ夫婦よりエエ。でもクサイ。香水持ってきてへんし……早よ、風呂に入りたい」

「せやな……完全に年上か……そうか！」

俺は納得顔を美英子に向ける。

「真正正銘の『お姉ちゃん』や！　なんで四大に行かんと短大に行ったんかも分かった！」

「バレたか」

美英子は頷いてから小袋から黒っぽいアメ玉を取り出す。

「四大に行つて卒業したらすぐ二十四になるもんな。四月アホか……」

包みを剥がして口に含む。

「せやねん。四月生まれは損や……これ、昆布巻きのアメちゃん。半分こ、でけへんから、全

後書

部あげる」

強引にキスしてきてアメ玉を押し込む。急に口を塞がれたから息苦しい。

「やっぱりマモルは頭エエなあ」

「そんな事、あれへん」

「マモルには生きてく知恵、あるやん。ウチと違う」

俺は舌でアメを片方に押し込んで声を出す。

「そんなモン、ある訳ないやろ」

「何、言うてんの！ 魔法のアメちゃん、舐めてんにウチの気持ち、なんで分かれへんの？」

美英子が俺の胸を両手で強く押す。

「婿入り道具、全部この中に入ってるやん！」

——えっ！ 俺、もらわれるんや！

「オカんに怒られてもエエから、ウチの家で風呂に入ろ」